

6

副専攻・国際教養教育プログラムで開講している海外研修

岩手県立大学高等教育推進センター 国際教育研究部 教授 高橋英也、講師 江村健介

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する

原則 10：異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く

1. 副専攻の概要

岩手県立大学には、学部・学科の専門（主専攻）に加えて、それぞれの専門が活かされる「世界」「地域」「国際」という視点から理解し、そこで生じる多様な課題に取り組む力を体系的かつ実践的に学ぶことができるプログラムとして、「地域創造教育プログラム」「国際教養教育プログラム」という2つの副専攻の課程がある。それぞれの課程の修了要件を満たすことで、「地域創造士」「国際教養士」の称号を得られる。国際教養教育プログラムは、グローバル化が進む世界において、異文化理解・多文化共生を基盤とした文化・社会を多面的理解に立脚し、自らと異なる文化的背景をもつ人々と協働し課題解決できる語学力を身につけ、主体的に行動できる実践力の育成を目指している。

2. 語学研修A

「語学研修A」は、オハイオ大学での3週間の研修を通して、① 米国での大学生活で使用される英語表現および大学生活に関する用語を身に付けること ② グローバル社会で不可欠な世界共通語である英語への興味・関心を育み、また深めること ③ 多様な文化的志向性に対応するために求められる知識・スキルについて実体験を通じて肌で感じ、多文化共生について理解を深めること、の3つを目標に掲げている。東日本大震災の発災直後に合同ボランティアの申し出を受けたことをきっかけに、2016年から現地への学生派遣が可能になった。参加者は、滞在中、オハイオ大学英語集中プログラムが提供する授業を受講し、ネイティブ講師により、英語の4技能について、多様な側面から指導を受けることができる。近年は、カンパセーションアワーと呼ばれる対話の場や日本文化の授業への参加を通して、現地学生と交流する機会が増えている。毎年8月には復興防災学習プログラムに参加するためにオハイオ大学学生が岩手を訪問するため、本研修は、日米間における双方向での交流の一翼を担っている。現地での主なイベントは以下の通りである。

- ・ウェルカムパーティ、フェアウェルパーティー
- ・日本語、日本文化の授業への参加
- ・現地学生とのカンパセーションアワー
- ・バスケットボール、アイスホッケー観戦
- ・小学校訪問 (Morrison Elementary School)
- ・州議事堂の見学 (State house of Ohio)
- ・州立公園でのハイキング (Old Man's Cave)



2023年度の参加学生 オハイオ大学キャンパスにて

3. 国際演習A

貧困、紛争、差別、環境破壊など世界が抱える様々な問題は地域の課題と地続きであり、世界を知ることは地域を理解することにつながる。国際教養教育プログラムの中で、国内外での異文化交流やフィールドワークを通して、グローバルな課題を実践的に学ぶ科目が「国際演習」である。2024年2月13日から28日までの16日間、20名の参加者がドイツとフランスの国境沿いに位置するアルザス地方にて研修を行った。歴史的に、国と国による領土の奪い合いが繰り返され、多くの苦難と犠牲を経験してきた地域である。現地学生との文化交流やEU議会の見学、岩手県と関係が深いCEEJA（アルザス欧州日本学研究所）への訪問、強制収容所の見学などを通して、多様性の尊重と共生の意味について、研修に参加した学生は多くのことを

学び、それぞれに成長の糧とした。また、帰国後には、大学祭での報告を通して研修での学びを学内外へ発信する活動も行った。現地での主なイベントは以下の通りである。

- ・ノートルダム大聖堂の見学
- ・ストラスブール大学の学生との文化交流会
- ・EU議会の見学
- ・ウンターリンデン美術館の見学
- ・CEEJAへの訪問
- ・在ストラスブール日本国総領事館への訪問



2023年度の参加学生 EU議会エントランスにて

4. 両研修の学びと成果

オハイオ及びアルザスでの研修終了後に参加学生から寄せられた感想を抜粋して以下に記載する。

〈オハイオ研修〉

- ・この3週間を通して、新たな知識やものの考え方、主体性や積極性、現地学生との友情など、多くのものを得ることができた。
- ・現地では英語を授業で学ぶというよりも、現地学生と同じ生活をする中でたくさん会話を重ねて、自然と習熟度を向上させることができた。

〈アルザス研修〉

- ・敵国の文化も排除せず、自分たちの中に取り込んで育てていく包容力の大きさに触れて、多様性を尊重する大切さを学んだ。
- ・積み重ねた歴史が今につながっていることを実感し、相手の国や人の背景を考え、理解することを意識するようになった。

〈両研修共通〉

- ・海外研修は「自分の価値観を変え、視野を広げるチャンスであること」を学んだ。現地での生活はすべてが新鮮で、たくさんの友人と思い出を作ることができた。

- ・現地では「挑戦すべきことがあればまずはやってみる、上手いかわなくても自分にとってプラスの経験になる」という考え方が根付いていた。この経験によって、「自分の考えを素直に表現し、行動に移すことへの心理的なハードルが下がった」と実感している。
- ・大学の支援奨励金制度があり、また教職員の手厚いサポートがあるため、安心して渡航・滞在することができた。
- ・海外研修は一定の経費がかかるので安易に参加を決めることはできないと思うが、お金には代え難い、そして言葉では伝えきれないほどの多くの学びや気づきがあった。自由に時間を使える大学生のうちに、ぜひ多くの人に体験してもらいたい。



オハイオ大学の学生との交流の様子



ドイツ・ケールから撮影したフランス（左側）